

学会企画シンポジウム 6

教育心理学におけるビッグデータ活用の実践と課題

【 企画趣旨 】

教育心理学は教育支援や指導等の効果をデータに基づき科学的に評価し、教育の指針にいかすことを目指してきた。これはまさに、近年重要視されている、科学的根拠に基づき教育支援の在り方を改善していく EBPM (Evidence Based Policy Making) の趣旨と一致している。しかし、古くから「教育心理学の不毛性」が議論されてきたように、得られる科学的成果を社会に還元することは容易なことではなかった。ところが、近年 ICT の進歩と GIGA スクール構想による情報端末等の普及により、行動データの収集法に大きな変化が起きている。すなわち、多数の個人から質の高いテストデータが収集される CBT が普及し始め、既に膨大なデータが集約できる状況が生まれている。また、国の GIGA スクール構想のもと全国の小中学生に一人一台の情報端末が配備されたことにより、日常的に個人ごとの膨大な学習ログや意識データ、すなわち膨大な縦断データが一元的に年単位で集約できる状況なども生まれている。

ここで、収集されるデータから有益な情報を見出すためには教育心理学の理論と知識、方法論が不可欠であることが、先行する教育サービスの実践研究で明らかになってきている。本シンポジウムでは、膨大な縦断的学習データ（教育ビッグデータ）が年単位で集約され始めている現状とその方向性を共有するとともに、実践事例を踏まえ、ICT に起因する教育の大きな変化に対して、教育心理学が果たす役割と課題について議論する。